

## ヨーロッパとは何かーアイデンティティ形成の過程ー

—Europe in History: the making of European Identity—

森 貴子（西洋史）

### 1. 講義の概要

2018年度後期・水曜日2限開講の外国史2は、三回生を対象に、上記タイトルで開講された。学期末試験受験者数は13名（初等教育コース小学校サブコース7名、中等教育コース社会科教育4名、国語教育1名、保健体育1名）であった。なお、比較によって今年度の達成度を見極めるため、昨年が続いて本科目を授業評価の対象とした。

#### (1) 講義の目的

本講義は、ヨーロッパやネーションといった集団が、そのアイデンティティも含めて歴史的に構築されたものであるとの認識に至ることを目標としている。

この目標を達成するために、「ヨーロッパとは何か」という問いを設定した。その空間としてのまとまりは如何にして形成され、また如何なる歴史的な性格を持つのか。本講義では、こうしたヨーロッパ意識の形成過程を、いくつかの具体的事例を取り上げつつ長期的視点から検討した。そしてそこから、地域的アイデンティティの複層性や変容、アイデンティティ形成における歴史の役割、そして「他者」の重要性などを明らかにした。

こうした認識を得ることは、ひいては、近代国民国家の成立以来我々を強烈に縛り付けてきた「ネーション」の相対化に繋がると同時に、紛争をはじめとした現代世界の諸問題を考える際の、糸口にもなると考えている。

#### (2) 講義の詳細

授業は、基本的に、講義形式で行われた。まずはなぜトルコはEUに入れないのか、その場合の「ヨーロッパ」とは何なのか、EUを脱退しようとしているイギリスの「ヨーロッパ」での位置付けはいかなるものか、などの問いかけをしたうえで、①古代ギリシアにおける異文化受容と近代ヨーロッパにおける

その否定(古代ギリシアの理想化)、②中世におけるヨーロッパ意識の勃興とその内容、③ヨーロッパ各地域におけるゲルマン的要素とローマ的要素の併存、④キリスト教(カトリック)＝ヨーロッパの形成におけるギリシア正教の役割、⑤「他者」としてのビザンツ帝国、オスマン＝トルコ、⑥地域紙幣(イングランド銀行発行紙幣に対するスコットランドとアイルランドの立場)とアイデンティティ、といった内容を扱った。

資料に関しては、各回の内容に沿った史資料を可能な限り準備し、学生の理解を手助けすると同時に、映像資料も利用した。

### 2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした(2019年2月6日実施)。アンケート回答者は学期末試験受験者の人数・所属と一致している(計13名)。

問1～6は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

- 5：強くそう思う(非常に良い)
- 4：ややそう思う(良い)
- 3：どちらとも言えない(普通)
- 2：あまりそう思わない(あまり良くない)
- 1：全くそう思わない(良くない)

<問い>

- 問1：この授業への出席状況は
- 問2：授業のテーマ・目的は、明確でしたか
- 問3：担当教員の説明は分かりやすかったですか
- 問4：配付資料・映像資料は有用でしたか
- 問5：授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか
- 問6：授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	6	3	3	1	0
問2	10	3	0	0	0
問3	7	6	0	0	0
問4	10	3	0	0	0
問5	3	4	5	1	0
問6	7	4	1	1	0

<各問に対するコメント>

問3：ヨーロッパ史に関しての知識がほぼな

かったが、わかりやすく説明してもらった

問4：古代ギリシャの「白のイメージ」が問

違であると分かって、面白かった

問5：世界史未履修にとっては、内容はサッ

パリ

◎ 問7～9は記述式で回答を求めた。以下、

紙幅の制約上、内容を整理して取り上げる。

問7 この授業で良かったと思う点、印象に

残った点を挙げてください。  
実際の貨幣や紙幣を用いたり、映像資料を用

いたりしていたため、理解しやすかった（3

名）／「ヨーロッパ」というものがどんなものか、勝手に考えていた。非常に見解を深めることができた（2名）／ヨーロッパのアイ

デンティティについて、古代～現在、そして

国と国との関係の視点など、様々な視点から

学べた（2名）／特にヨーロッパの多様性について理解できた／高校で学んだ部分に触れてから掘り下げていくことで、理解しやすかった／イギリスのアイデンティティの話

問8 この授業で改善すべき点を自由に挙げて

ください。  
講義形式／世界史の教科書のこのページなど

と言ってもらえると助かる／学生に「考えさせる」ような内容だと、もっと授業の内容が身につくと思う／特になし（3名）

問9 この授業を受講して、我々の生活している地域社会（日本や四国、松山）とアイデンティティとの関係について、考えたり調べたりしましたか。

自分の故郷を馬鹿にされたりすると、腹がたつことがある。そう言った土地という要因もアイデンティティに含まれるのだと思った／アイデンティティについては思考した。地域社会と関連づけてはいない／日本の紙幣の人物などが選ばれた理由について調べた。椿神

社の神様について話を聞いた／自分の出身地域と自己アイデンティティについて考える時間が増えた／していない、特にしていない（3名）／無回答（5名）

### 3. 授業の達成度—昨年度との比較と今後の課題—

昨年度と今年度の受講者は同数で、その意味ではアンケート結果の比較が容易であった。昨年度と比べた場合の今年度の特徴は、授業の内容理解や思考に関わる問5と問6の評価が低かったことである。今年度からは、受講生が予習・復習しやすいように、高校世界史の教科書の該当部分を前もって指摘したり、授業中にも読みあげたりして工夫したつもりだったので、少々残念な結果であった。この点に関して、問3と問5に付された真逆のコメント、また問7と問8の対立する記述を勘案した結果、個人差をどのように埋めるかという課題が浮かび上がってきた。

### 4. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

本講義の最終的な目標は、ヨーロッパに関する研究成果を学ぶことで、地域に生きる自分自身のアイデンティティを問い直す姿勢を育成することである。アンケートの問9は、これに関連した質問である。回答からは、一部の学生が自分の出身地とアイデンティティの関係について、客観的に把握しようとした様子が見受けられる。ただし、半数の学生が無回答あるいは否定的な回答をしている。これにはアンケートの「問いかけ方」自体も関係している可能性がある。というのも、実は試験問題にもアイデンティティに関する考えを自由に論述するセクションがあり（問4）、そこではアジアの中の日本（韓国や中国と対抗しつつ形成されるアイデンティティ）や故郷と過疎の問題（地元の「消失」とアイデンティティの「消滅」？）など、各々の受講生がそれなりに考察を深めていることが確認できるからである。従って今後は、アンケート内容を工夫すること、そして授業の中で身近な「地域問題」を取り上げて議論することで、アイデンティティの歴史性を認識した上での「郷土愛」について、受講生自身に考察する機会を与えること、これらが課題としてあげられる。